

## 教材研究と教材の扱い方 (8)

—「空に小鳥がいなくなった日」(谷川 俊太郎)—

菅 原 敬 三

一

谷川俊太郎の「空に小鳥がいなくなった日」を取り上げる。「新訂版 現代の国語」(平成二年版 三省堂)の二年生に収録された教材で、その実際は次の通りである。

空に小鳥がいなくなった日

谷川俊太郎

森にけものがいなくなった日

森はひっそり息をこらした

森にけものがいなくなった日

ヒトは道路をつくりつづけた

海に魚がいなくなった日

海はうつろにうねりうめいた  
海に魚がいなくなった日  
ヒトは港をつくりつづけた

街に子どもがいなくなった日  
街はなおさらにぎやかだった  
街に子どもがいなくなった日  
ヒトは公園をつくりつづけた

ヒトに自分がいなくなった日  
ヒトはたがいにとても似ていた  
ヒトに自分がいなくなった日  
ヒトは未来を信じつづけた

空に小鳥がいなくなった日

空は静かに涙流した

空に小鳥がいなくなった日

ヒトは知らずに歌いつづけた

〔谷川俊太郎詩集〕による

詩の扱い方には十分な注意を払う必要がある。ある詩で行った教材研究や教材の扱い方が、他の詩にそっくりそのまま通用するということが極めて少ないからである。作者の主張や訴えを支える詩の表現が多様に成り立つことにその原因がある。従って、この「空に小鳥がいなくなった日」では、何が問題になり、どのように扱うのが有効なのか考えてみたい。

## 二

作品制作の過程に目を向けて考えてみると、次のことが分かってくる。まず、筆者や作者が事態や現象についての意見や判断や主張を持ち、それを表現しようとする。多様にある表現形態の中から、彼等が自分の得意とする表現形態を選択する。主張を詳述するに便利な評論形式にするか、言葉の飛躍に価値を見出して韻文形式にするかは彼等の選択するところである。

韻文形式の場合、意見や主張を詳述できないだけに表現に工夫が凝らされる。従って、その効果を十分にとらえて

おく必要が出てくる。この詩の場合、表現の工夫に注目して作者の主張をとらえるのが効果的である。

最初に気づくことは、繰り返しと対比である。しかし、その繰り返しと対比がかなり複雑に用意されているから注意を要する。まず「くくくがいなくなった日」が、各連に用意されている。そして、それが一連から五連まで同じ形式で繰り返される。しかし、繰り返しはこれだけではない。各連に句読点は施されていないが、それを施すと「森にけものがいなくなった日、森はひっそり息をこらした」「森にけものがいなくなった日、ヒトは道路をつくりつづけた」となり、二行ずつの文が繰り返されているのである。その形式は一連から五連まで変わらない。そして、各連の最後の行に書かれている「ヒトはくつづけた」が一連から五連まで繰り返されている。

当然繰り返しの効果は、読者にその表現を強く印象づけることにあり、表現内容を強調することにある。「森にけものがいなくなった日」は、過去のことではなく未来のことである。「森にけものがいなくな」ることは、現時点の我々には考えられないことであり、信じられないことである。信じられないことだけに、繰り返しの効果として読者に「森にけものがいなくなった日」を意識させることができる。現代への警鐘、これが作者の主張だが、分析を深めな

ければその内実は見えてこない。

次に、対比について見ていきたい。それぞれの連に句読点を施すと二文になることは前に指摘したが、二文目の「森にけものがいなくなった日」を取り除いてみると、対比関係がはっきりしてくる。「森はひっそり息をこらした」と「ヒトは道路をつくりつづけた」とが対比関係になり、両者の関係が明らかになる。

それでは、なぜ「森はひっそり息をこらした」たのに対して、「ヒトは道路をつくりつづけた」ことができるのか。

「森にけものがいなくなった日」とあるが、自然現象として「森にけものがいなくな」ということは、火災や火山の爆発など特別なことがない限り考えられない。具体的には書かれていないが、人間の自然破壊や開発が原因であり、道路の敷設が原因である。それは「ヒトは道路をつくりつづけた」の部分に暗示されている。人間が道路をつくるのは、自然のためではなく自分達のためであり、自分達の都合によってつくるのである。人間のためにつくった道路が自然を破壊し、植生を破壊する。挙句の果て、「森にけものがいなくな」るのである。そして、森はあらゆる生き物を包み込み育む本来の性質を無くして、「ひっそり息をこらし(呼吸を押さえ、静かにし)」ているのである。森が「ひっそりと息をこらした」日、森はその本来の姿を保てないだけに、森が森でなくなる。しかし、「ヒトは道

路をつくりつづける。なぜ、そういうことになるのか。

「ヒト」が「ヒト」のことしか考えないからである。「ヒト」が自然の中の一員という意識を無くした時、「ヒトは道路をつくりつづける」ことができる。従って、「ヒト」は人間と自然とのバランス感覚を失った「ヒト」であり、人間の都合だけを最優先する「ヒト」である。人のため道路をつくる「ヒト」は、人のためにいいことをしているのであり、人のため役立つことをしているという意識を持っているのである。「森はひっそり息をこらした」状態で、「ヒト」が「道路をつくりつづける」とどうなるのか。

人が人でなくなるということに「ヒト」は気づいていない。人も自然の中の一員であり、人だけが突出する訳にはいかないということに気づいていないのである。こういう「ヒト」の姿に作者は警鐘を鳴らしているのであり、反省を促しているのである。

ここまでのことを、構図的に整理すると次のようになる。

森にけものがいなくなった日 (森が本来の森でなく

なった日)

森はひっそり息をこらした (呼吸を押さえ、静かに  
していた)

(あたかも死んだかのように)

ヒトは道路をつくりつづけた（活発に働いていた）

（人のためいいこと、役に

立つことを？ していた）

（これでいいのか作者の警告）

第二連から第五連までこの構図は変わらない。

ただ、第三連と第四連とは内容的に他の連とは別の分析をしておかなければならない。「街に子どもがいなくなった日」、「ヒトに自分がいなくなった日」とは何を意味するのか。「街に子どもがいなくなった日」の問題はどこにあるのか考えておきたい。「街に子どもがいなくなった」のは何に原因があるのか、それを探るのが重要なのではない、「街に子どもがいなくな」る状態がおそらく問題なのであろう。大都会の姿がイメージされているのではない。今でも大都会の抱えている問題は多様にある。昼間と夜間との人口の差が極端であり、大都会の居住者はその中心部に近ければ近い程少ないという状態にある。人の住む環境としては、決して望ましい状態ではない。地価も高いときている。人が人らしくあるために「公園」は必要である。しかし、その「公園」でのびのび遊ぶはずの子どもの姿が見えない。仕事に追われる大人は、「公園」の有効な

利用者ではない。「ヒト」は何のために「公園」を「つくりつづける」のか、ビルだけが乱立する殺風景をなくすために、また人間らしさを取り戻すために「公園」をつくるのであろうが、その利用者がいない。その空しさだけが浮かび上がってくる。それだけでなく、夜になると危険な場所としてのイメージすら浮かび上がってくる。その恐ろしさ。

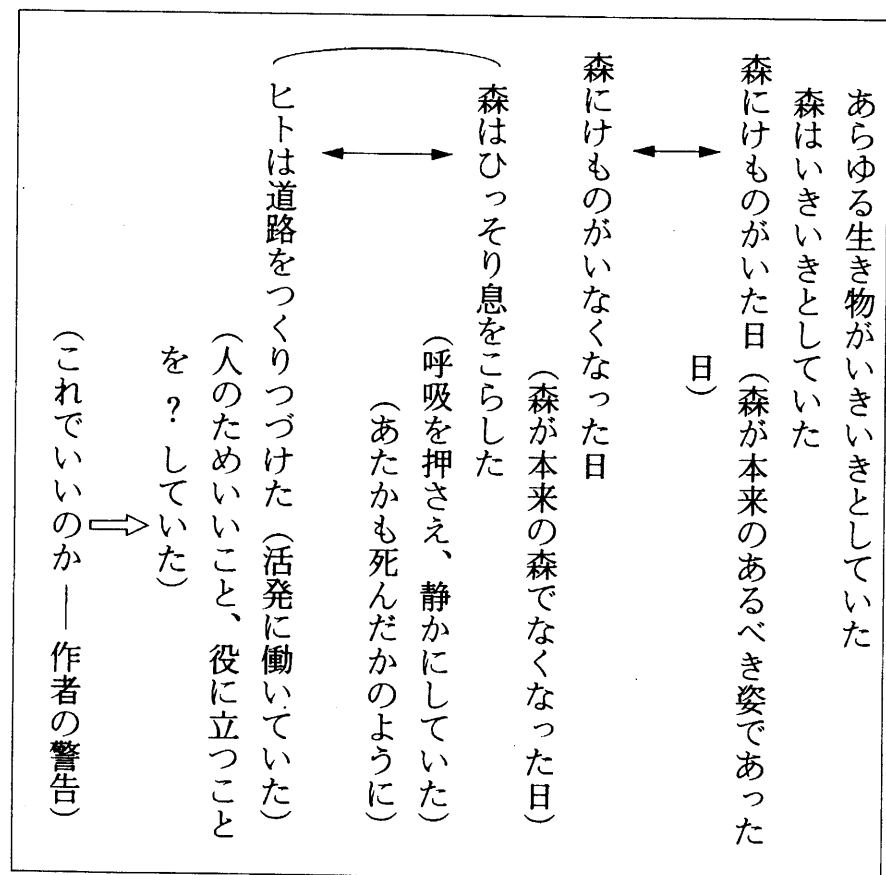
「ヒトに自分がいなくなった日」とは、どういう時に起こるのか。自分とはどういう人間なのか、自己のアイデンティティを見失った時、自分を振り返り自分と問答をしなくなった時、人は「ヒト」となる。人が自分の個性を無くすため「ヒトはたがいにとても似ていた」ということになる。世の中のことは自分にとってどうでもいいことであり、他人まかせにするために「未来を信じつづけ」という状態が生まれてくる。「森にけものがいなくなつ」ても、「海に魚がいなくなつ」ても、「街に子どもがいなくなつ」ても、「空に小鳥がいなくなつ」ても、「ヒトは未来を信じつづけ」ることができるのである。

表現効果をねらった工夫に目を向けると、第四連を除いて各連の最初の三行の頭に同じ文字が並び、それと対比して最後の行の頭に「ヒト」がくる。「ヒト」と対比して「森」「海」「街」「空」がある。三行続いているだけに「森」「海」「街」「空」に存在感があり、読者の視覚に訴

えて効果的である。しかも、「森」「海」「街」「空」は人間にとって大切なものであり、人間が人間らしく生きるために欠くことができないものである。

そして、行末に目を移せば「——日」「——た」と韻を踏んでいる。各連四行の二文と合わせて、朗読にも適しているようにつくられている。

以上の分析で、教材に込められた問題が全て明らかにになった訳ではない。対比関係にもう一度目を戻さなければならぬ。対比関係に目を戻した時、何が見えてくるか。「森にけものがいなくなった日」が繰り返され、読者に印象深く訴えかけているのだが、実はここに問題を解く鍵がある。「森にけものがいなくなった日」と対比されていることを発見することが重要である。書かれていないが、当然「森にけものがいた日」が見えてくる。「森にけものがいなくなった日」が未来の姿であれば、その対比として過去の森の姿がイメージされていなければならない。「森にけものがいた日」、森はどういう状態であったか。「森はひっそり息をこらした」との対比関係で「森はいきいきとしていた」、または、「あらゆる生き物がいきいきとしていた」状態にあった。本来あるべき姿として存在していた過去の森の姿である。対比関係としては次の構図が見えてくる。



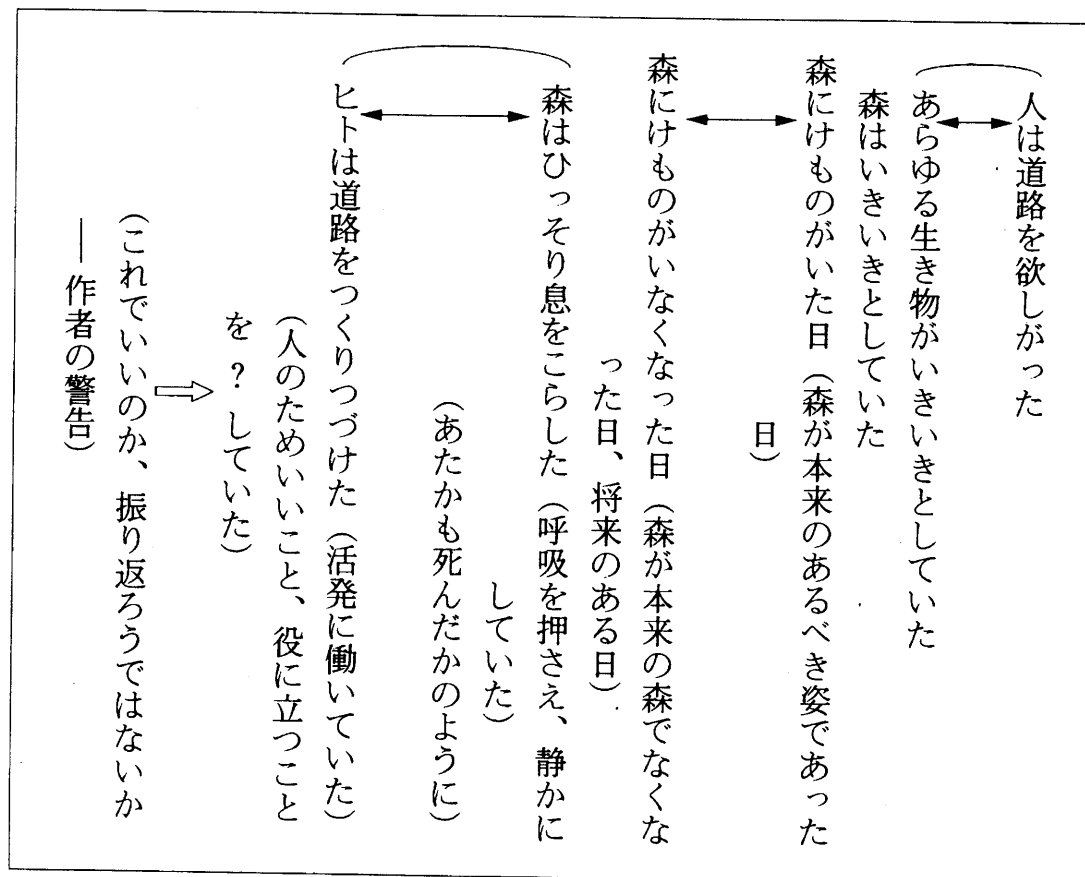
「森にけものがいなくなった日」の切実さは、「森にけものがいた日」との対比において鮮明になる。両者の関係が鮮明になれば、作者の主張である「現代への警鐘」はより立体的になる。

しかし、これだけでも不十分だと私は考える。人間の問題が解決されていないからである。「森にけものがいた

日」、あらゆる生き物（人間は除いて）がいきいきとしていた中でも、やはり人間は道路を欲しがったのではないか。それが人間というものである。人間の歴史の中で、科学の進歩にまた便利さに価値を置かなかった時代があったであろうか。答えは否である。智恵を働かせ、自分達の生活の簡便さを求めて止まない生活を営んできたのである。その方向でしか歴史を作り得なかったのは、人間の本性がそこにあるからにはかならない。科学の進歩を求めるのは決して悪いことではない。人間の本性をとらえてはじめて、この詩に込められた構図が明らかになるのである。

しかし、これも自然と人間の力のバランスが保たれていてこそ話である。自然の力が人間にまさっている時には、問題は起こらない。人間も自然の一部だからである。人間の力が自然にまさった時に問題が起こってくる。自然が無くなれば、自然に育まれている人間も生きていけないからである。作者は、決して自然の開発を止めよと言っているのではない。今のままで開発を続けるとどうなるのか考えてみようではないかと言っているように思える。そうでなければ、現代社会への警鐘とはならない。直ちに自然の開発を止めよというのであれば、一つの立場だけを尊重した意見ではない。そうではなく、『ヒト』よ、立ち止まって自分達のやってきたことを振り返ってみようではないか。今がその時だ」とよびかけているように思う。第

一連に注目して問題点を整理して図式すると、次のようになる。



但し、右の図は第三連と第四連とでは一部修正がある。二行目と四行目の関係が対比関係ではなく、近似の関係となる。つまり、街の空疎な（生活の匂いの無いという点で）姿と我が身を顧みない「ヒト」の姿との間には、本来あるべき姿からは遠いという点で通底している。第四連も同じ構造を持つ。

であり、

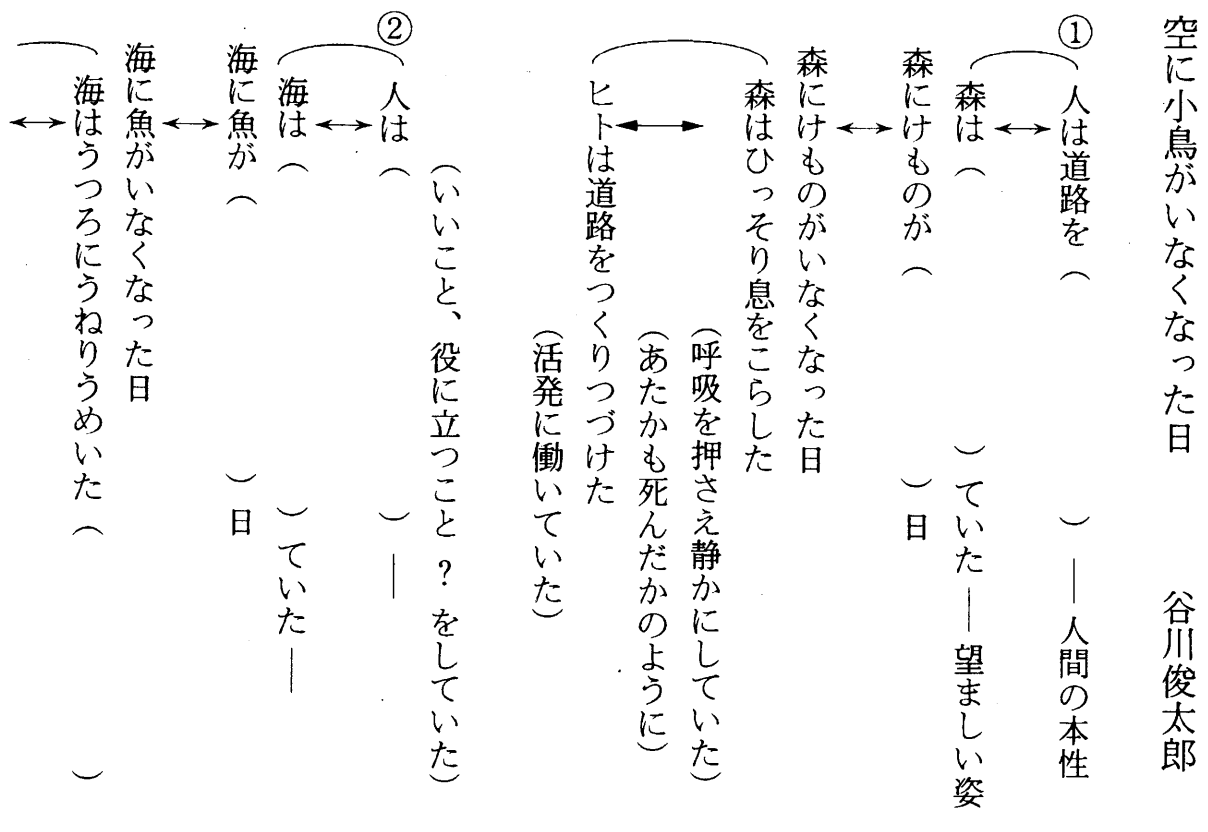
街はなおさらにぎやかだった  
 ヒトは公園をつくりつづけた

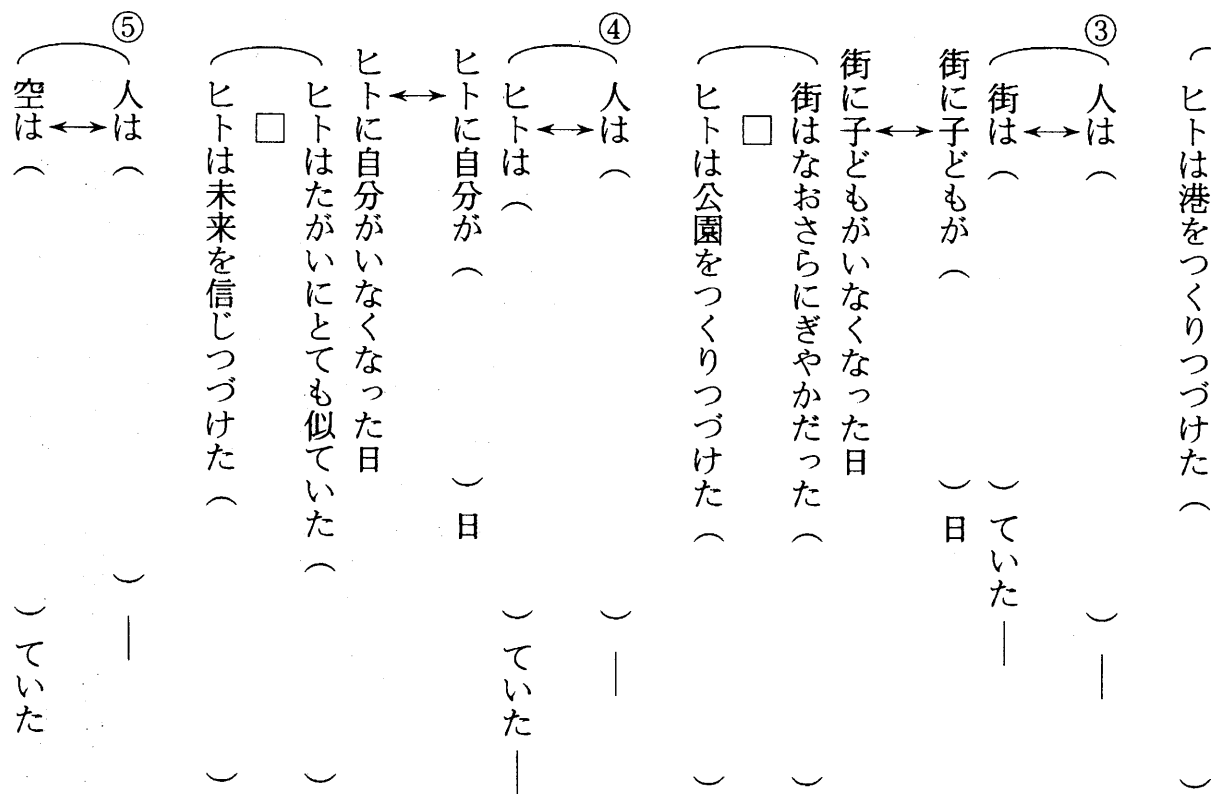
ヒトはたがいにとても似ていた  
 ヒトは未来を信じつづけた

となる。

### 三

授業に際して、次のようなプリントを用意するとよい。





空に小鳥が ( ) 日

空に小鳥がいなくなった日

空は静かに涙ながした ( )

ヒトは知らずに歌いつづけた ( )

作者の主張をまとめよう

表現の効果をまとめよう

・ ・ ・ ・

(注) 第三連と第四連の□には、授業の際に両者の関係を考えさせ、記号を記入させる。

授業展開は多様に考えられようが、次のような展開も一つの方法であろう。

板書は第一連で基本的な問題の整理を行い、第二連以降はプリントを利用した学習にする。

【第一時】

目標 1 「空に小鳥がいなくなった日」に込められた作



者の意図（現代への警鐘）をとらえさせる。  
2 表現の工夫（繰り返し、対比等）に着目させ、  
内容に切り込む手掛かりとさせる。

学習活動	指導上の留意点
1 学習目標を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> <li>「作者がこの詩で訴えたいことは何か」また「どういう点に表現の工夫があるか」の目標を明示する。</li> </ul>
2 詩を音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習目標を意識化させる。</li> <li>書き手が主張したい内容と表現形態との関係について説明する。</li> </ul>
3 内容と表現との関係をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>この場合の表現形態が詩であること、さらに韻文の場合には多様な表現技法が用いられることを説明する。</li> </ul>
4 表現の工夫をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>繰り返し、対比、押韻、擬人法など気づいたところから指摘させる。</li> </ul>
5 第一連に用いられた表現から作者の主張に迫る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>第一連だけは板書を利用してまとめる。プリントは第一連のまとめが終わった段階で配る。</li> </ul>
(1) 繰り返しと対比に注目する。	
(2) 繰り返ししの表現を抜き出す	<ul style="list-style-type: none"> <li>「森にけものがいなくなった日」がすぐとらえられるのは、視覚的な効果によることを押さえる。</li> </ul>

(3) 第一連を音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>音読を通して、最初の二行と残りの二行が繰り返しのリズムになっていることをとらえさせる。</li> </ul>
(4) 繰り返しの効果をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>出ない場合は、第一連に句読点を付けさせ、最初の二行と残りの二行が同じ表現のリズムになっていることをとらえさせる。</li> </ul>
(5) 対比の表現をとらえる	<ul style="list-style-type: none"> <li>強調や強く印象づけることが、その効果であることをとらえさせる。</li> </ul>
(6) 対比の内実をとらえる	<ul style="list-style-type: none"> <li>「森はひっそり息をこらした」と「ヒトは道路をつくりつつけた」が対比関係にあることをとらえさせる。</li> <li>「息をこらす」の意味を確認する。</li> <li>「ヒト」と「人」の違いをとらえさせる。</li> <li>「森」の窮状と「ヒト」の喜び・躍動感の対比関係をとらえさせる。</li> <li>「森はひっそり息をこらし」ているのに、「ヒト」はなぜ「道路をつくりつつけ」られるのか、考えさせる。</li> <li>自然と人間とのバランスを考えずに、開発に熱心な現代社会に対する警告であることを第一段階としてとらえさせる。</li> </ul>
6 作者の「森にけものがいなくなった日」に込めた主張をとらえる。	
7 作者の主張の深さを、表現されていて	

ない対比表現に着目してとらえる。

(1) 「森にけものがいなくなった日」と対比されている表現を考える。

(2) 「森にけものがいた日」の「人」の姿をとらえる

(3) 人間の本性をとらえた上で、作者の主張の価値を考える。

8 「空に小鳥がいなくなった日」全文を音読する。

・「森にけものがいた日」がその表現であることをとらえさせる。  
・「森にけものがいた日」は、森がどういう状態にあったのか考えさせる。

・森が望ましい状態である時、あらゆる生き物が活気づいていたことをとらえさせる。

・あらゆる生き物が活気づいていても、人は道路を欲しがらる姿をとらえさせる。

・進歩や発展に努力するのが、人間の本性であることをとらえさせる。

・第二段階として、作者の主張が単なる現代社会への警鐘ではないことをとらえさせる。

・作者の主張が明らかになった段階で、詩の全文を音読させる。

・この段階で、プリントを配付する。

## 【第二、三時】

目標 1 配付されたプリントをもとに、第二連以下の空白部に自分（学習者）の解釈を書き込み、作者の主張に対して自分の立場を明確にする。

2 相互にプリントを比較することによって、自分の判断と他人の判断との比較を行い、自分の判断の独自性と普遍性を確認する。

3 作者の主張を把握した上で、朗読に役立つように表現の工夫をまとめ、朗読する。

学習活動	指導上の留意点
1 学習目標を確認する。	・プリントの空白部に自分の判断を書き込むことを告げる。 ・また、朗読を行うために留意する点を整理するよう告げる。
2 詩を音読する。	・二名に指名読み。 ・後で行う朗読も意識化させる。
3 プリントに書き込んだ自分の意見の価値を知る。	・内容に矛盾が無ければ、表現は自由であることを確認させる。
(1) 第一連を作成し、他人の意見との比較・検討を行う。	
(2) 「ヒト」と「人」の違いを確認する。	・「人」は自然と人間のバランスを考え得るのに対して、「ヒト」は自分の都合だけを優先する人間であることを確認する。
(3) 第一、二、五連と第三、四連との	

違いをとらえる。

(4) 第三連と第四連の内容を読み深める。

4 作者の主張をまとめる。

5 表現の効果をまとめる。

(1) 内容理解のために表現の工夫をまとめる。

(2) 朗読のための表現の工夫をまとめる。

・第一、二、五連は同じ構図になっていることを確認する。

・「街に子どもがいた日」の「街」の状態と「人」の様子をとらえさせる。

・「街はなおさらにぎやかだった」と「ヒトは未来を信じつつけた」との関係をとらえさせる。

・「ヒトに自分がいた日」の「ヒト」の状態と「人」の様子をとらえさせる。

・「ヒトはたがいにとっても似ていた」と「ヒトは未来を信じつつけた」との関係をとらえさせる。

・「くくがいなくなった日」と対比関係にある「くくがいいた日」とを総合的に考えることによって、作者の主張を文章にまとめさせる。

・授業のまとめとして、表現の工夫を整理する。

・それぞれの表現効果についてまとめる。

・視覚に訴えている点（各連の行の頭にある森、海、街、空）も意識化させる。

・森、海、街、空が人間にとって大

#### 6 詩の朗読を行う。

なものであることを確認させる。

・句読点を付けることによって、各連が二文構成になっていることを確認させる。

・各連最初の三行は暗いイメージであるのに、最後の行だけは明るいイメージであることをとらえさせる。

・その明るさには皮肉が込められていることをとらえさせる。

・朗読によって、作者の主張である「現代社会への警鐘」が表現できるよう注意を促す。

・強調すべきところ、暗く沈むイメージ、また明るく振る舞う人間のイメージが出るように朗読させる。

・間のとりかた、スピードにも配慮するよう注意を促す。

朗読は表現領域に属しており、その中で育成すべき学力は多くあるが、その問題は別の機会に譲りたい。ここでは、朗読の初期の段階を意識しての指導上の留意点を記すにとどめた。